

小林勝作品集 5

第5卷

解説 金石範

生命の大陸 瞻星 夜の次の風
の夜 全員蒸発 万歳・明治五

十二年 日本狂人日記（絶筆）

小林勝作品集——第5卷 ©1976

一九七六年三月一五日印刷 一九七六年三月二五日発行

著者——小林勝

装本——駒井佑二

発行者——臼井浩義

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

発行所——株式会社 白川書院

東京——東京都新宿区左門町三ノ四 電話 〇三—三三—三三四 二二六 振替東京六四四〇
本社——京都市左京区北白川追分町八七 電話 〇七—六二—三九〇 二六六 振替京都九三
0393—7559—3114

小林勝作品集

— 第5卷

編集委員

野間

長谷川

菅原

中野

四

重

克

野

宏

郎

己

治

第5巻——目次

生命の大陸

生命の大陸——7

朝鮮・明治五十二年

万歳・明治五十二年——143

全員蒸発——158

夜の次の風の夜——191

瞻星——251

評論・エッセイ

在日朝鮮人学生への右翼テロルに抗議する——323

「朝鮮人になる」ことの意味——333

極限における人間性——337

ふたつの記録文学——339

「日曜日にはネズミを殺せ」の中の「祖国」——342

革命への激しい渴望——347

ユダヤ人虐殺の歌——348

ドキユメンタリーの今日的方法——353

*

日本狂人日記（絶筆）——361

解説 金石範——371

解題 藤井徹——380

*

小林勝略年譜——399

生命の大陸

——生と死の文学的考察——

もくじ

序章 内なる大陸への旅

I 俘囚の精神

II ドキュメンタリー精神の宣言

第一章 未知への準備

I 死者たちの復活

II 無知からの恐怖

III 羞恥心について

IV 痛みの考察

記録ノートから／＼2月22日～3月9日▽

第二章 打撃との闘い

I 死の幻影

II 羞恥心の予想と現実

III 薬と食物考

記録ノートから／＼3月13日～4月12日▽

第三章 変貌した大陸で

I 肺外科医考

II 恐怖再説

III ただ一度の生—ノイローゼ再考

IV 行為と自由

記録ノートから／＼4月15日～6月14日▽

序章 内なる大陸への旅

I 俘囚の精神

かつて私の畏敬する先輩作家長谷川四郎がぶよぶよした裸の大きな腹を大写しにしたストリッパーの写真を見て、（むろん、これは芸術写真である）、人間のおなかとはとても思えない、広大にして起伏に富む平原の奇怪な相貌に衝撃をうけたのか、ぼくはストリッパーの裸を眺めるよりも、聴診器をあてて内部の音を聞く方を好む、というようなことを書いた時、彼が社会的・自然的存在としての人間の、その「自然」に著しい興味を持ち、その内部を科学的にまた文学的に探検したいという熱望に捉えられていたことは確かであり、実際に裸の腹に聴診器をあてたかどうかは、どうでもよいことなのである。

彼がそう書いた時、彼はおのれが、真正正銘のドキュメンタリー精神の持主であることを実証したのだ。いつの日か長谷川四郎はそのような「自然」の探検調査をおこなって、ユニークな報告を私たちにもたらしにちがいないと、それ以来私は楽しみにしていたのだが、彼はいつこうに内部の探検に旅立つようすはなく、そのかわりに、ドイツへ行き、帰ってきてしばらくするとキューバへ行き、また帰ってきてしばらくするとソ連へ行き、そうかと思うと、ヨーロッパからは悠然と貨物船で帰ってくるというような帰り方

を示し、そのたびに、多くの日本人旅行者とは異なった作品を発表した。そして私は、たとえば、まさかこの自分が、わが「自然」の内なる大陸への旅にかり出される破目になろうとは思ひもしなかったのである。いや、第一、私はいやおうなくその旅にかりたてられながら、自分がそのような道に既に踏みこんでいるなどとは、いっこうに自覚していなかったのだから、私のメスもそうとうに刃こぼれしていたにちがいないのだ。

私は常々自分に言いきかせてきた——ガラスの灰皿はガラスの灰皿であり、スプーンはスプーンであり、こうもり傘はこうもり傘以外の何ものでもない——と信じて疑わない精神構造を拒否することを忘れた瞬間から、お前の墮落が始まる、と。だがしかし私は見事に足をすくわれたのだ。

ある朝、病院へ行き、レントゲン写真をとられてから、医師の前にすわると、あなたは、まぎれもない肺結核だ、と彼は断固とした口調で私に言った。——あなたの胸には大きな空洞がある、痰^{たん}が出るでしょう、多分あなたはそこらじゅうへ生きのいい結核菌をばらまいているのだ、即刻入院しなければならぬ。日頃の考え方からすれば、この瞬間から私は、明確な意識をもって、もっぱら外部へ注いでいた視線をおのれの内部へ向けなければならなかったのだが、いや本来、私の視線は私の内部から発射されて外部の対象をつらぬき、そして、人間衛星のように再びわが内部へと戻って来ていなければならなかったはずなのだが、私は断固とした宣告に不意うちをくらって、うちのめされ、呆然自失の状態になっていたらしいのだ。

肺結核だ、肺結核だ、という言葉が無数の蜂のように私の頭の中でぶんぶんいいながら飛びまわり、肺結核は肺結核だ、それだけのことだ、などという意味のない心境にずり落ちた。そういう言葉は、結局何ものも明らかにせず、極めて受身なものであって、状況に対する私という主体の能動性をどこにも含んでいないのである。これは一種の戦慄放棄であり、探検心の欠落である。いわば、あなたまかせなのだ。

私は、これが人間精神にとって何を意味するかについて、殆ど何も気がついていなかった。みじめにうちめされていながら、一方では戦闘性と探検心の喪失が、根拠のない願望と理由のない楽観とを無制限に、ほとんどみだらなほど生み出すありさまを見ていた。少しは長くかかるだろうさ（根拠がない）、しかし、死にはしないだろうさ（科学がない）、なにいずれはなおるにきまっているさ（科学も根拠もない）、というわけである。

しかし、人間が状況にうちのめされ、戦闘を放棄し、探検心を失い、愚かで空虚な夢想到に身をゆだねる時、彼は、実は人間精神において最も尊いもの、すなわち、自由を喪失するのである。おれは行動の自由を一時的に失ってはいるものの、おれの心は何ものにも束縛されず、おれの想像力は常に状況を乗り越えてひろがる、と私は本気で思いこんでいたのだが、そのようなことは本来あり得ることではないのだ。東京オリンピックの年、昭和三十九年の暮れ近くであった。

それからまる一年たって、自宅療養をしていた私は、一年間のストレプトマイシンとヒドラジッドとパスによって、完全に排菌はとまり、発病時に五十キロを割っていた体重は六十三キロとなっていた。しかし、私の心は暗かった。その時私は、つづげざまに三つの打撃を加えられて、ようやく事態が私にとって想像もしなかった問題をつきつけていることに気がついたのだ。

砲弾の一つは予想もしなかったところから飛んできた。

私が唯一の力強い味方だと思って頼っていた内科の医師が、やわらかな声で、あなたの病巣はきれいになった、と言った。ではなおったことですか、と私は言った。いや、と医師は頭をふった。なおったとは言わない、きれいになったと言ったんです。

さて、私にはわけがわからない。後にふれることになるが、結核のように長期のまだるっこい治療を要する病氣にあって、医師がぶつかる困惑の一つは、人々がその肉体の内部について、実にあやふやな知識

しを持ちあわせていないということなのである。自分が生きている間じゅう所有し、動いている器官だからなんとなく理解できているつもりになっているが、つもりはどこまでもつもりに過ぎないのだ。そして怠惰な私も当然その一人だったのである。

空洞の周囲のかげも消えたし、空洞そのものもきれいになった、と医師はつづけた。中葉にある菱型をした結核腫もかたまって、ここ半年まったく変化がない、内科としては多分ここまでする限度です。

「きれいな」空洞とはいったい何だ？ 結核腫という、腫瘍の腫の字のつく無気味な言葉は何を意味しているのか？ 内科の限度とはつまり、あとはどうしろということか？ 私は不安で胸をしめつけられた。

しかし、どうやら私にとって、すべてが終わったのではなく、何か一つの段階が終わったらしいこと、そしてこの先には、まだ何やら恐ろしい未知の道があるらしいことを私は医師の言葉から嗅ぎとっていた。空洞はカラカラになってきれいになっている、つまり、浄化空洞だ、と医師はレントゲン写真を見ながらつづけるのだ。もうこの中には菌はいないかもしれないし、あるいは執拗に残っているかもしれない、それはわからない。なぜわからないんですか、と私はいささか不信の念にかられて声を大きくしたらしい。わからないんですよ、と医師はこともなげに私の声をはね返した。痰を培養しても菌はみつからないし、写真ではこのとおりきれいだし、実際にメスでたちわって調べない限りわからない、つまり、内科としては、ここまでしかわからないのです。結核腫とは、つまり肺がおかされてチーズのようになって、そこがくずれてやがて空洞になるのだが、この写真で見ると、かたまったまま動かない、昔は、いやいまでもそういう人がたくさんいるが、これで一応よくなったとして社会復帰したのです。

そんなものをほって置いて、そこから再発することはないのですか、と私は驚いて言った。その危険性はある、しかし、再発するかしないか、それはどっちとも断定できない、と医師は言った。だからどうしろというんですか、と私は幾分脅えて言った。だから内科の治療はここまでくればもう何年やったら同

じことだというんです、この空洞はつぶれなかった、これから何年葉をのんでもつぶれないでこのままです。では仕事を始めてもよいんですか。さあね、と医師は微妙な声でゆっくり言った。手術してしまえばいいんだけどね。いいんだけど、何ですか、と私は言った。

医師の言うところによると、私は以前に肋膜^{うくまく}をわずらっていてそのために右肺下葉部の肋膜^{うくまく}の癒着^{うちやく}がはなはだしく、手術は技術的にかなり困難だというのである。こうしたことについて、私が明確な知識を持っていなかったのも、それはわが肺の鮮明なイメージとなって私の前に現れず、ただ何やら不吉な一群の言葉として私の心をうちすえたのである。そして特に、「かなり困難な」という毒のある棘^{とげ}のような形容詞をもつ「手術」という言葉が私に突きささった。

私は扁桃腺^{へんとうせん}や盲腸をはじめとして、メスを肉体につきたてられた体験を持たない。私が盲腸手術や胃の手術直後の人を見舞うことに気がすまないのは、土気色をして喘^{あえ}いでいる人の顔を見ると、その切られた痛みが直接こっちの体に伝わるような気分になってかなわないからである。つまり、臆病^{おくびょう}なのだ。第一の打撃はこういう形をとって私にのしかかった。

第二の打撃は、結核とは何の関係もない文字を通してやってきた。

昭和二十九年に私は「現在の会」という文学運動組織に参加した。「現在の会」は当時の若い文学者が結集してつくった同人組織で、安部公房、安東次男、泉三太郎、針生一郎、真鍋呉夫、柁木恭介、関根弘といった、私にとってはいわば兄にあたる年齢の人々が中心になっていた。これらの人々はさまざまなジャンルで仕事をし、研究活動をおこなっていたが、私が入会してみると、ドキュメンタリーについての研究が活発化しており、昭和三十年にいたって、それは明確に第一段階としてルポルタージュ運動となり、「日本の証言」と銘^{なづ}うったルポルタージュシリーズが刊行されることとなる。

なぜこんなことを不意に書き出したかというと、私が幾分沈鬱^{ちんうつ}な気分で古雑誌の整理をしていると、そ

のシリーズの宣伝広告のチラシが、畳の上に落ち、その「刊行のことば」が私の眼をつらぬいて、脳に衝撃を与えたからである。それは次のような文章だった。

「われわれは今、奪われた未来をとりかえすために、祖国の深部にむかつて出発しようとしている。

言葉の靴をはいて——空をとぶ靴、地にもぐる靴。

そこはしかし、まだ暗く、いたるところに目に見えない壁が張りめぐらされている。工場と工場の間、町と町との間、人と人との間、魂と魂との間に。

われわれは闇にむかつて光の薪を投げるもの。

地図のないところにわれわれの地図を創りだそう。」

いま読んでみると、そこには若干偏狭なナショナリズムのにおいがしないでもないが、そのことを論ずるのが目的ではないから、これ以上述べない。私が衝撃を受けたのは、奪われた未来をとり戻すために、空をとび、地にもぐる言葉の靴をはいて出発するというその気負いたった宣言である。

空をとび、地にもぐるという言葉は連想的に、わが内なる自然へ荒々しく踏みこむ、という言葉が浮かびあがらせた。その宣言は、フロンティア・スピリッツともいえるべき開拓・冒険精神に燃えていたわが過去と、暗い脅えの中で、状況にだらしなくおさえこまれてずるずると日を送っているわが現実を強い光で浮かびあがらせた。これはもはやおれにとってたゞことではない、おれの危機だ、魂の危機だ、と私は感じたのだ。プロクラメーション（宣言）ではなくプロクラスティネーション（ぐずぐずのひきのばし）だ、と私はくだらぬごろ合わせをして自嘲した。そこで奮起一番私は、というぐあいには現実はなかなかいかないのである。状況は悪く、しかも私の前にひろがっているらしい世界は私にはいまだ見えず、まったくの未知そのものであり、恐怖そのものなのである。これが第二の打撃だった。

第三の打撃はぎょっとするような物質の形をもって現れた。後の話だが、手術病棟に小林を名乗る者が

私をいれて三人おり、私をてっとり早く識別するため、切れものの主任看護婦は、どの小林さんですか、と看護婦に聞かれると「デブだよ」と答え、たちまちそれが私であることが通じたのであるから、手術前、私がどんなに肉付きがよかったか推察されると思う。つまり、私は発病一年後には、外見上は健康そのものに見えたのであり、結核そのものは痛むわけではないので、行動の限界について自分で明瞭に線を引くことが困難だった。そして、ぞっとするような結果が起こった時はじめて、それをひき起こす原因となつたおのれの行動を一つの限界として認識することになる。

ここにおいて、行動における自由の観念は条件付きとなり、一定の制限の下におかれる。そして私の体験および考えによれば、一定の制限下におかれた、条件付き自由ということは、すでに自由の原理を喪失したものであるべきなのだ。条件付き自由ということは、まやかしであり、詭弁的レトリックにすぎない。そこには自由という文字及び観念を部分的にもせよあてはめることはできない。

また、行動の限界はそこを越えてはならない直線のようなものとして現れてくるものではなかった。限界は円周をもった一つの圏として迫ってくる。圏の中心に私がおり、異常をひき起こした一つの行動が私に与えるさまざまな指標、つまり、時間の量、脈搏の数、体温、発汗の程度、運動の激しさと量、等々の統合が、いわば体内感覚として私に教える一つの感覚となつて円周上の一点にある。だから、同様な感覚を私に与えると予測させるすべての行動が、無限につらなりつらなつて円周を形成するという感じの中に追ひ込まれて行くようになるのだ。これはもはや圏内という条件付きの自由ではない。圏にかこまれたという意識、圏外へ一步も出られないという、精神の背骨へうちこまれた意識、そして圏内といえども、偶然の突発事いかによつてはけつて安全ではないという恐れ、これらは明らかに幽閉された者の意識であり、自由喪失の意識であり、状況の俘囚と化した意識である。

第三の打撃は、ぞっとする物質の形をとつて現れ、これまで述べてきたような意識状況に私がつき落さ

れていることを、はっきりと自覚させたのだった。

それは真冬にしては暖い日で、風のない夕方だった。私は三十分以上、道路で近所の子供たちとパドミントンをし、幾分汗をかいたほてった体で家へ戻った。そして痰が出るのを感じてチリ紙に受け、何気なく眺めて、愕然としたのだった。C痰と病院で言う殆ど無色のすぎ通った痰の上に、一本の赤い線がくっきりと見えたのである。

全体が赤ければ血痰であり、赤い線がまじれば血線と患者はよんでいたが、それはまぎれもなく血線だった。肺結核と言えば、言うまでもなく結核菌によって肺組織が崩壊するのだが、たまたま太い血管の走っている場処がやられたのでない場合は、そうそう血を吐くものではない。私は発病後二、三回血痰を出しただけで、治療をつづけた一年間、一度として血痰、血線を見たことはなかったのだ。

空洞もきれいになり、結核腫もかたまって、昔は（いや、いまでも）退院したものだと思われたばかりであり、私はすすめられた「かなり困難」付きの手術に脅えながら、このまま仕事を始めても案外やるのではあるまいか等と虫のいい空想をしたのであるが、三十分のパドミントンの運動は、私の無知を嘲笑し、冷酷かつ客観的事実として、血線いりの痰を内部から送ってよこしたのである。第一、第二の打撃の後私はこの第三の打撃によって止めを刺された。

おのれの内なる世界の全体と細部、各々の関係等を科学的に殆ど知らぬということは、愚かきわまることである。知ろうとしなかったことは、知するための能動的な戦闘性を放棄したという意味でも、さらに愚かきわまることである。あなたまかせということは、つまり、魂の荒涼たる退廃ということの俗な表現ではあるまいか。

おれは自由を完全に失った、と私はついにいさぎよく認めた。行動の自由だけでなく、それをつらぬき支える精神の自由をも失っていた、おれはいまや、その全存在を完全に病いに呪縛された俘囚である。そ

して私は長い年月の間、ひそかに愛誦しつづけた一九世紀ロシア詩人の詩をもはや口にする資格を持たないと感じた。その一節は私の恣意的な訳によるとこんなぐあいだった……

お前は辱かしめられ

お前はぶちのめされ

しかもなお お前は

誇りにみちたきびしい

おのれの顔を持ちつづけ……

それから私はつらい気持を抱いたまま、かのレフ・トルストイがわれわれに残してくれたロシア農民イワンの記録を思い出し、兄たちから、馬鹿だ、うすのろだ、低能だ、きたならない奴だ、とさげすまれたイワンの足もとにもおよばない存在にずり落ちていると思わずにいられなかった。ロシアの片田舎に出現した大悪魔と醜惡な三匹の小悪魔は、たとえば中世ヨーロッパに、あるいはベスト菌をばらまき、あるいは魔女がりをおこなわせるなど、人間の無知を逆に武器として利用しつつ人間を痛めつける悪業のかぎりをつくしたと思えるのだが、ある日ひょっくりと、善良で労働を愛する農民イワンの前に現れたのである。彼等は、ある者はイワンの鎌の刃をぼろぼろにさせ、ある者は、ロシア農民の愛する飲み物、クワスの中へ唾（赤痢菌やチブス菌がうじゃうじゃしていたにちがいない）を吐き、イワンの労働意欲を殺ごうとしたのだが、次々とイワンに発見されてしまった。すなわち、労働の勝利。

神様のおめぐみを、というイワンの言葉を聞くやいなや、悪魔たちはたちまち大地へとびこんであとには穴しかなかったとトルストイは記録してくれている。トルストイ流に言うならば、一九六〇年代にいた